

◆東京藝術大学特別講義（DOOR）第6回目

演題	児童虐待と里親制度
講師	白田 有香里（はくた ゆかり）氏 一般社団法人 COCO PORTA 代表理事、千葉市ひまわり会（里親会）会長、 東京都児童相談センター相談援助課 統括課長代理 児童相談所で働きつつ、養育里親として2人の男の子を育てています。そして、里親会の会長をやりつつ、自治体の管轄に縛られずに里親（特別養子縁組 含む）支援、子ども若者支援、子育て支援などをするために一般社団法人COCO PORTA を立ち上げました。 福祉のイメージも里親のイメージも変えたい！ 座右の銘は「今より若い時はない。」

◆◆受講生の感想◆◆

2年 ①

今回の講義を聞いて、少子化だけど児童虐待数が増えている原因としては、認識が変わり、現在で明確化してしまったことや核家族化、離婚率の増加が関係していることが分かった。児童虐待数を減らすためにも日頃の話をできるような集会を開いていたり対策がなされていることも知ることができた。児童虐待とDOORの関係として、里親になるという決断が自分の人生を選んだということと繋がるという話を聞いて、絵やアートとはまた違って面白いと感じました。自分も人生の中で大きな決断をするときは、アートとの繋がりを感じたいと思いました。

2年 ②

現在も虐待は多くあることが分かりました。虐待を受けても相談することが難しく悩んでいる人もいることが分かりました。虐待予防には、自分一人で抱え込まず、SOSを出すことができるような環境をつくったり、子どもの特性を知ること、特性に合わせた対応ができるようになることが分かりました。つい仕事などに没頭してイライラしたりすることもあると思うが、養育する側も少し子どもと離れて、リラックスすることで予防につながるということが分かったので、気分転換なども大切だと感じました。

施設ではできないことが里親家庭ではできることも多く、親子関係の構築や個を重視した対応もできるので、実親とは離れても暮らしやすい社会があることを初めて知りました。また、今後児童虐待を受けた子ども達に出会うことがあるため、正しい対処法をして子ども達が今後幸せに暮らせるように配慮・情報提供などの対応をしていきたいです。

2年 ③

虐待について学習する際に%の数字ばかりに目がいきがちだが、実際は通告されず発見されていないケースもあるということが分かった。ニュースで報道されて

いるのは、ほんの一部であり、日本の中には4万人以上虐待を受けており、その環境は様々であり、その背景には社会の変化も関係していることが分かった。

里親の目標は最終的には自宅に帰したり、子どもの特性を理解したりすることであり、看護に当てはめると、対象の今後を見据えた支援や個別性と共通していると考えた。全ての人を対象としている看護で自分が援助することで誰かの扉を開けたら幸であると思った。

1年 ①

今回の日田さんの話を聞いて、児童虐待と里親について今までよりさらに詳しく学ぶことができました。最近、ニュースでよく見かける車に子どもを放置して亡くなるというのも1つの虐待で、「ネグレクト」に値するということを学ぶことができました。里親制度だけでなく、ファミリーホームという家庭に近づけようとしているということを初めて知りました。

看護師にできることとして、患者さんのご家族の精神面や経済面など多面的な部分のサポートがあげられると思うので、患者とそのご家族に寄り添うことのできる看護師を目指したいです。

1年 ②

本当にひどい虐待をする人の気持ちは理解できないが、虐待をしてしまったという裏には、頼れる人がいなかったなどの防げたはずの理由があったのではないかなと思う。今の社会は昔に比べて地域との交流も少なくなり、孤立しやすく、また他人への興味がうすくなっていると思う。「母親を助けないと真に子どもを救うことはできない」という言葉が忘れがちなことだなと思った。

日本は“血”を昔から重んじていたから、里親制度の普及が遅れているのではないかなと考える。少しでも笑顔で安心して生きられる子どもが増えるように、自分にできることは何か、考えていきたい。

1年 ③

児童相談所の相談・通報が年々増加しているのは、児童相談所の認知度・認識が増加していることもあるが、核家族・ひとり親・地域の人との関わりが減っているなどの時代の変化が理由でもある。しかし、今の時代、プライバシーの問題も増えているので、地域の人との関わりを増やすことが難しくなっていると思う。里親の制度がいくつかあるのを初めて知ることができた。里親・施設それぞれ良い面はあるが、里親では、子どもの興味関心、生活スタイルと個を重視した対応がしやすかったり、生活スキルが身に付いたりするなど、施設では周りの目を気にせず、生活ができると思った。里親・施設どちらもその子の個性、考えを尊重することが大切で、それは看護の患者さんを援助する上で大切なことと同じだと思った。